高知県の自然林

【現　状】

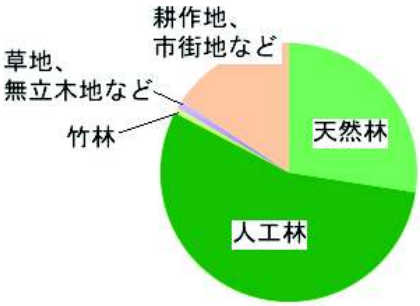

図１．高知県の土地利用

高知県の森林率は84%を超えており全国一です。しかしその2/3 はスギやヒノキの人工林で（図１）、また天然林の大半は伐採跡に成立した二次林です。本来の姿を留めている自然林（原生林）は、残念ながら僅か数%しか残されていません。

自然林のタイプは、おおむね標高によって変化します（垂直分布）。一般に低標高域（～600m）ではシイやカシ類を主体とした常緑広葉樹林（写真1）が、その上部（～1000m）にはカシ類やモミ・ツガなどで構成される中間温帯林が分布しています。標高1000mを超えるとブナやミズナラを主体とする落葉広葉樹林（写真2）が、より高標高域（1500m～）ではウラジロモミやシコクシラベから成る亜寒帯性針葉樹林（写真3）が分布しています。

写真１．常緑広葉樹林

写真２．落葉広葉樹林

写真３．亜寒帯性針葉樹林

【変　化】

図2は、ここ50年程度の森林タイプの変化を示しています。1960年頃までは、天然林：人工林の比率が2：1程度でしたが、1970年頃を境に比率は逆転しました。これは、戦後の復旧のために大量の建築用材が必要で、広く天然林を伐採してその跡にスギ・ヒノキを植栽したためです。また、採草地や耕作放棄地などにも植林が進んだようです。

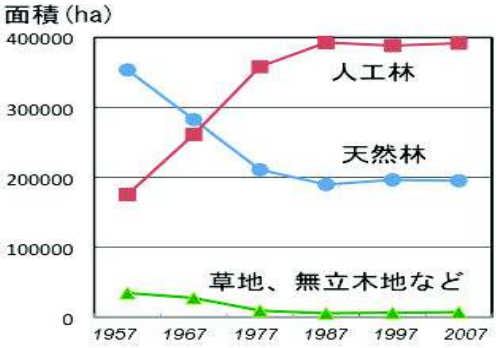

図２．高知県の森林タイプの変化

【人とのかかわり】

自然林のほとんどは、背梁山脈地域など人里から離れて分布しています。国定公園（剣山、石鎚）や県立自然公園（魚梁瀬、白髪山など）に指定されていることが多く、登山やレクリエーションの場として利用されています。また、水土保全機能などを通じて間接的に下流に貢献していると言えます。

鳥居厚志（森林総合研究所四国支所）